

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」 からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する その二

草 薙 太 郎

1. はじめに

文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い、富山大学人文学部の研究室に1990年頃から収集し、随時オンラインのデータベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから、米国の文化的特徴が読み取れる。それを「『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その一」¹「その二」²としてまとめた。

その成果をもとに、シェイクスピア＝ベーコン説を検証することができるとした。そのことをデータベースの分類項目（1）移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴の中の、さらに細分した項目(a) 心理学、臨床心理学などと関連するものと、(b) 枠にとらわれない米人流自由研究に対応する部分について、「『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する その一」³としてまとめた。

本稿はその続編である。同じデータベースの分類項目（1）移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴の中の、さらに細分した項目(c) 映画に関連するものと、(d) 多民族国家、植民地政策などに関わるものに対応している。

なお、一連の論考は、随時更新されたデータの、発表時での最新データに基いている。

(c) 映画に関連するもの

本稿ではキーワードとして、「ニュートン主義」、アメリカの「映画のヒューマニズム」、そして「ベーコン主義」の三つを使用したい。「ニュートン主義」は、すでに科学史、科学技術社会論などでは使われている用語であって、内容をすぐに説明するつもりである。アメリカの「映画のヒューマニズム」は、その存在自体は日々私たちに直感的に訴えてくるものの、その正体を突き止める考察を要するものである。「ベーコン主義」は「ニュートン主義」をもじっ

1 富山大学人文学部紀要第40号（2004）.

2 富山大学人文学部紀要第42号（2005）.

3 富山大学人文学部紀要第44号（2006）.

た造語である。この三つが互いに深く結びついていることを言えば、シェイクスピア＝ベーコン説の「思想的な」検証になるのではなからうか。

さてアメリカの「映画的人文主義」の淵源をベーコンに求めたら奇矯な考えだろうか。映画は科学技術によって成立することと多民族や多くの階層を取り込むという二つの重要な要素がある。

フランシス・ベーコンは単なる近代哲学の祖ということだけでなく「科学技術という思想」の祖でもあると私は考えたい。

科学を、全く無機質な、宗教、哲学、政治、その他人文科学的な思想と関りのないものとするのは間違っているとして、科学史家は「科学イデオロギー」とは何かを探求したりもする。その観点で、ジェイコブはニュートンの周辺を探求し、ボイル・レクチャーズなどを、イギリスの中心的「科学イデオロギー」を示すものとした。

ジェイコブほど熱心に「科学イデオロギー」を探求した科学史家は、そういない。

ジェイコブはアイルランド出身であり、宗教のからんだ民族差別に苦しみ、一方で、ダブリンはロンドンと変わらぬ文化都市として先端的な役割を果たした関係で、イギリス本国の文化史と、連動するといつていいほどにアイルランドは関った。アイルランドはイギリス本国から差別され、様々なイデオロギーを押し付けられた国ともいえる。そのジェイコブが、「科学」も無機質なものではなく、思想信条が背景にあるイデオロギーだと見なして「科学イデオロギー」を探求した。このジェイコブの、そうして探求した成果⁴は貴重なものがある。

ジェイコブは、「ニュートン主義」という言葉を生み出すボイル・レクチャーズにこだわる。これと、マローンの正確な（科学的なといつていい）シェイクスピアのテキスト校訂とが、「科学」とシェイクスピアの関りで目立つ十八世紀の事象である。他にも、そもそもシェイクスピアを復活させる音頭を取ったのは詩人ドライデンであり、演劇の訓練を良家の子弟の教育に持ち込んだバシュビーが創始したウェストミンスター・スクール（いわゆるイートン、ハルなどの名門パブリックスクールの元祖）の出身者として、「理系の教育は文学者にも必要」と主張する一方、自ら改作した『嵐』を、無人島での男女の出会いの実験劇とみなし、さらに原作にない男女のペアをもう一組加えた。

このように英国の科学技術といえれば代表者はアイザック・ニュートンであり、その活躍時期は一時廃れたシェイクスピア劇の復興の時期に当たるので、パブリックスクールの教育とも関連して英国中流階級の文化的価値基準との関係で論じるならジェイコブの考え方は参考になる。しかし、英国の科学技術のそもそものさきがけはフランシス・ベーコンであり、復興期にそこまで理系の関心を惹いたとすれば、シェイクスピア作品にベーコンの影を見ないではいられない

4 Jacob, Margaret C, *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*, (Cornell University, 1976).

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する

い。それはベーコンの影響をシェイクスピアが受けたというよりベーコンを、その科学技術への関心や科学技術理想郷としての「ニュー・アトランティス」への想い、アメリカへの関心などを含めシェイクスピアが利用したのではなかろうか。そのシェイクスピアがベーコンを利用した部分こそがアメリカの「映画的人文主義」と関わる部分だと思う。

同じ「科学イデオロギー」についての考察にしても、ジェイコブの「ニュートン主義」にせよ、ガリレオ、コペルニクス、デカルトといった科学史でお馴染みの人々の思想にせよ、科学と政治権力、科学と教会の権威との戦いなど、「科学をめぐるきしみ」とでもいった観点からの考察である。あるいはフランス的合理主義という、一見科学的に見えて、結局ニュートンの天才にはかなわなかった思考形態もある。これも科学をめぐる「きしみ」と言える。アイルランド出身者が「科学イデオロギー」考察に熱心なもの、そうした「きしみ」への興味とも言える。

フランシス・ベーコンは初めから権力の中核にあって権力の周縁にある科学者が権力に近づこうとしたり迫害されたりする「きしみ」とは無縁であったと断定してもよいのではないかと。そして宗教を最大限尊重しつつ狂信的なもの、迷信的のものを排し、意見の違う人々の調整に司法に携わるものとして心をくだき、公正さを心がけ、どこかこだわりがあるとすれば当時の社会情勢からローマ・カトリックへの批判は常にあった。

ハリウッド映画制作は、まず詳細なディスカッションで始める。アメリカ映画を注意深く鑑賞すれば、その底に詳細なディスカッションがあることに気付く。その議論はベーコンの議論に似ていると思う。

これを踏まえて米国シェイクスピア研究博士論文の映画に関するものを見てみよう。ゼフィレリ、ブルックによる映画の比較分析ながら、前者は『ロミオとジュリエット』後者は『リア王』なのだから、手法の違いは作品による必然とも思える論考⁵がある。これなどは元の作品より映画化された結果を重視する点で米国を押し出す論考といえる。映画は最も米国的な「映画的人文主義」表現の手段であって、民族の枠を超えたボーダーレスな思想表現である。

黒澤明が『マクベス』を『蜘蛛の巣城』に翻案するとき、能をどのように使ったか、序破急などの技術論を展開する論考⁶はまさにそのことを表している。

つまりアメリカ映画は人種や階層の違いを乗り越えて普遍的な人文主義を映画の画面上に実現しようとし、迷信、狂信を（観客の興味を惹く手段として使った上で最終的に）排除する安定した精神基盤があって、ディスカッションはかなり技術的なことになるとされる。

5 Biesinger, Kathy, *Style and signification in Shakespeare film: a study of the narrative realism of Franco Zeffirelli and the symbolism of Peter Brook*, (1990). 930.28||Sh||Bie

6 Lai, Ming Liang, *Akira Kurosawa's use of Noh in "The throne of blood", his film adaptation of William Shakespeare's "Macbeth,"* (1993). 932||Sh||Ma=La

技術的なことを中心にディスカッションすることで画面の統合がはかれる世界を支えるのが「映画のヒューマニズム」なのだ。

もしシェイクスピアをテーマとした映画だからという理由で、そこに英国中流階級の伝統的な価値基準を強固に持ち込むスタッフが現れたら、映画制作は頓挫するであろう。それとは別のアメリカ独自の映画論、シェイクスピア論を展開して、なおシェイクスピアから離れていない信念をアメリカ映画の制作者が持つとしたら、シェイクスピアがベーコンを利用したせいだと思う。ベーコンの思想が結果としてアメリカを包み込んでいる。同時にベーコンが格闘した問題意識が映画制作現場でも依然として生き残っているのではないか。

この構図はロバート・レスラーの『心理分析官』と、トマス・ハリスの『羊達の沈黙』及びその映画化を考えればわかる。連続殺人事件や異常な性犯罪を捜査するFBIの捜査技法に「プロファイリング」という、どこか演劇の登場人物の性格分析のようなものがある、その実践の記録が実際にFBIで「心理分析官」（プロファイラー）として捜査にあたったレスラーによって書かれた。それを小説化し、やがて映画化されたのがトマス・ハリスの『羊達の沈黙』ということになる。

これはシェイクスピア=ベーコン説を考えるヒントになる。レスラーをベーコンの立場に、レスラーの関与した実話を小説化したトマス・ハリスか、そのさらに映画化を企画したプロデューサーをシェイクスピアの立場におけば、実質的に「羊達の沈黙」を書いたのはレスラーだという意味で、シェイクスピア作品の作者はベーコンだという意味の「シェイクスピア=ベーコン説」が成立するのである。犯罪捜査目的のレスラーは、プロファイリングという名の人生鳥瞰図を描いても、それを種に演劇、映画として面白がる姿勢を第一に考えるわけではないであろう。その違いを強調すればレスラーに近いベーコンとは別個の人格として、トマス・ハリスや映画化を企画したプロデューサーに近いシェイクスピアの姿勢が浮き彫りになる。

それは日本で「法医学はドラマになるぞ」という期待で、映画やテレビのドラマ担当ばかりか「ドラマ化した」ニュースを担当するディレクターやプロデューサーが法医学関係者に接触する姿勢に似ている。法医学とはまさに解剖に直結する。それは、いわば人体を切り刻むのであるから、独特のホラー感覚を伴う。同時に、これから人類の未来を変えるかもしれない科学的発見の予感も当然みなぎり、SF感覚といったものも醸成される。その事情はシェイクスピアが活躍した当初も同じであった。シェイクスピア時代、公開の解剖も行われていた。そうした活動が未来を開く感覚は当時の方がより強かったであろう。そこに「演劇人」シェイクスピアが目をつけたのではなかろうか。「科学は芝居になるぞ」という期待である。

ベーコンは「科学者」であり、大法官という犯罪を裁く最高の地位を目指す人物であった。実証を重んじ、帰納法的な思考方法を唱え、法律の専門家で、法が想定する犯罪と犯罪心理に詳しいベーコンなら、一連のシェイクスピア演劇の「ホラー・SF感覚」の源に指定できる。

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する

レスラーの記述にはロバート・ケネディ暗殺犯が、鏡に映した自分の顔が粉々に壊れる妄想を持つくだりが出てくる。それで否応なく連想させられるのは、エセックス一味が反乱の景気付けにした『リチャード二世』の有名な退位シーンで、退位を迫られた王が鏡を持ってこさせ「これが臣下をはじめ皆が太陽のようにあがめた顔か」と自分の顔を見て、鏡を床に叩き付け粉々に割るシーンである。王権という「国家幻想」の破壊シーンである。これと同じようにロバート・ケネディ暗殺犯は、アメリカ的「国家幻想」の体現者ケネディ家の「美と狂気」に同化し、同化した自己を破壊したのだと思う。

ただし、アメリカという国家は旧世界の国家とは少し違う。古代ローマ帝国の影を帯び、「アメリカの夢」と、それを裏返しにした、いわば「アメリカの犯罪」といったものが主柱になっているような趣がある。

このことは先述⁷した「狂気の大衆化」とも関係する。個人を解放したい欲求と、権力が押し付ける拘束との間で板挟みになって狂気に至るのは、シェイクスピアの舞台上では王侯貴族であった。しかしそのモデルは王侯貴族気取りの将軍であったり、将軍より下位の一兵卒、さらに名もない大衆でもあったと思う。ハムレットのモデルはアイルランド討伐司令官のエセックス伯爵であったかもしれない。リチャード二世のモデルはひょっとしたらベドラム（当時の精神病院兼救貧院のような施設）の患者であったかもしれない。王侯貴族の芝居に大衆を観察した結果を利用するとすれば、シェイクスピアは学問と職人の知恵を結合させようとしたベーコンの手法を演劇に利用したことになる。

そして、名もない民衆が英雄を気取るシェイクスピア時代のイギリスの傾向はアメリカに継承され拡大発展する。大衆社会であってかつ巨大な「帝国」であるアメリカは、大衆一人一人が帝王の幻想を持ちうるスケールの大きな国家になる。イギリスでは名もない大衆が支配階級にのしあがるには数世代を要する。シェイクスピア自身もグラマースクールで教育を受けた。百年後、貧しく、半ば母に捨てられたような状態から身をおこしたニュートンも特待生の形でケンブリッジ大学の教育を受けた。教育もなく、一代での成功を夢見るのはベドラムの狂人が大部分であったであろう。しかし、新世界アメリカでは、それは決して狂人の夢ではない。

アメリカの「映画的ヒューマニズム」を支える活動は「科学や法」を通じて国民の安寧をはかり未来を開く活動と、それを様々な階層に向けて発信する映画というメディアに密接する活動に分けられ、その関係がベーコンとシェイクスピアの関係（つまりシェイクスピア作品における二人の役割と推定されるもの）を彷彿させる。その点を米国シェイクスピア研究博士論文の映画に関するものが示唆してくれる。

さてこの項の冒頭で「映画は科学技術によって成立することと多民族や多くの階層を取り込

7 富山大学人文学部紀要第44号（2006）p.9.

むという二つの重要な要素がある」としたうち、主として科学技術について考察した。次に映画のもう一つの要素である「多民族や多くの階層を取り込む」ことについて述べる。それは映画との関係だけでなくシェイクスピア演劇の大きな特質であり、そこにもベーコンとシェイクスピアの関係が重要な役割を果たすと考える。

(d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの

一六〇一年に『ハムレット』が上演され、その幕切れにハムレットの遺体が運び出されるとき「武人としての礼を尽くせ」というメッセージが述べられる。それから翌年の二月に、荘重な儀式の後エセックスは斬首される。エリザベス朝政府はエセックスの人気を恐れ（つまり民衆の判官びいきを恐れ）最初からアイルランドと組んだ陰謀を企んだのがエセックスであったように証拠文書を編集する。（そう言えば『ハムレット』の幕切れは、デンマークと競争関係にあるノルウェーの王子が軍を率いてやってくることで終わる。「礼を尽くせ」のメッセージも、この王子の口から言われる。）その巧妙な編集をしたのがフランシス・ベーコンで、そのことで女王から大きな報酬を得ている。

エセックス事件をめぐる、シェイクスピアとベーコン、庶民と体制側のインテリたちの微妙な駆け引きがそこにあるようだ。そういう中で、『ハムレット』は上演された。

ハムレットのモデルをエセックスとすれば、その上演が当局に対しエセックス処刑を「丁重にやれ」と注文をつけたことになる。単純に解釈すればシェイクスピアはエセックスを英雄視する側、ベーコンは逆にエセックスのイメージを引き下げる側に立ったことになる。

ベーコンには「復讐について」「信教の統一について」というエッセイがある。「赦しは人間の栄光」とソロモンは言ったとして争う愚を説き、社会を連帯させる宗教の力を認めつつ統一と均質化の違いを指摘し、無知を退け聖戦反対を唱える。これからも伺えるように、当時の英国はカトリック教国に取り巻かれ、ヨーロッパ最初のプロテスタントの国で、ローマ教皇に反旗を翻して成立しながら、国の内外に争う勢力を抱えていた。エセックス事件はアイルランド問題という、現代にも尾をひく難しい問題の一端でもある。

こうした状況にある国の為政者の中心にあって、ベーコンは「多民族や多くの階層を調和させる」のが仕事であった。そこに心をくたく姿勢は真摯なものがある。エセックスを英雄視し過ぎないように工作することも、そこから来ていると思われる。

それとは一見対立するシェイクスピアの姿勢はどのようなものだったのだろうか。「多民族や多くの階層を調和させる」というより恋愛に関心を持ち「民族や階層の壁」に敏感であったと思う。その敏感さは恋愛を通してのものであった。

シェイクスピアの作品（三十七とも三十八ともいわれる戯曲、長詩を含む数編の詩集）から

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する

伺われる「創作ではない事実」を感じさせる人間関係は、『ソネット集』から伺われるものだけである。『ソネット集』に登場する詩人は、必ずしもシェイクスピアその人ではないとも言われるものの、これしか鍵はないのだ。『ソネット集』の人間関係は、モデルの特定を始めとして諸説が積み重ねられている。その有力なものを複数睨みながら推定するほかはない。

『ソネット集』の前半は、美少年が自分の美に溺れて非生産的活動ばかりに従事せず結婚しなさいという趣旨の詩である。これは美少年のモデルの一人であるサウサンプトン伯爵の母に頼まれて書いたという説もある。種保存と世代継続の必要性を訴える詩人の論調は、『ハムレット』冒頭のクローディアスの巧みな演説に似通う。

『ソネット集』の登場人物は三人で、若き貴公子であるサウサンプトン伯爵とも、少年俳優の一人ともいわれる（私は両面があると思う）美少年と、シェイクスピア自身らしい詩人と、ダークレイディーといわれる恋の手練手管に長けた女性である。

先述のようにサウサンプトン伯爵はエセックス事件に連座して投獄された。『ソネット集』でダークレイディーといわれる恋の手練手管に長けた女性の毒牙から可愛い美少年を守ってやりたいという思いが綴られるくんだり、「愛の虜」という想定ではある。しかしダークレイディーといわれる恋の手練手管に長けた女性が小間使いの女性がモデルという説はあるにしても、広く宮廷に出入りする高等娼婦をモデルにしてもよいし、そこにエリザベス女王の影を読み取ってもよいと思う。女王はエセックス伯爵を「愛の虜」にして、反逆され、鎮圧して処刑した。それに付き従ったサウサンプトン伯爵も投獄した。政治的にも、恋の面からも手練手管に長けた女性と、若き貴公子二人との関係である。『ソネット集』を考慮にいれると、この若者二人は一体として扱ってよいと思う。

この詩集で、詩人は美少年に対し「愛して欲しい思いを受け入れてもらえず、苦しみ、身分違いの壁（この場合モデルは貴公子）を感じる」という感情を吐露する。この詩集では「あなた」と「わたし」はしばしば入れ替わることを言う。自分が最高だとナルシズムに陥っていて、突然愛の対象は「あなた」だという結尾になる詩もある。詩人は逆に美少年が「愛して欲しい思いを受け入れてもらえず、苦しみ、身分違いの壁を感じる」はめに陥る姿を描きたくなかったのではないか。同じ詩集では、繰り返せば、ダークレイディーといわれる恋の手練手管に長けた女性から可愛い美少年を守ってやりたいという思いも綴られる。この場合は美少年の少年俳優的側面だと思う。

これを演劇にすればハムレットに対しオフィーリアが「愛して欲しい思いを受け入れてもらえず、苦しみ、身分違いの壁を感じる」姿になる。少年俳優が演じる可憐な乙女なのだ。詩集にはダークレイディーといわれる恋の手練手管に長けた女性への抗議とも受け取れるくんだりが多くある。これは、ハムレットが母であるガートルードの性的放縦をいさめる場面を髣髴させる。同時に『ソネット集』で詩人が美少年の「不倫」をなじる調子とも一致する。

「多民族や多くの階層を取り込む」のは映画の特徴であり、アメリカという国家そのものの特徴であった。それはシェイクスピア作品の特徴でもある。それはベーコンの「多民族や多くの階層を調和させる」仕事を間近で見ながら「多民族や多くの階層の壁」を恋愛を通して切実に感じるシェイクスピアが一種の感情的なアンチ・テーゼを提供するものだったからだと思う。つまりエセックス事件をベーコンは「処理」し、シェイクスピアは「戯曲化」したとする。ベーコンはエセックスの英雄意識と女王の寵愛を過信する自己陶酔的行動を批判し、シェイクスピアはその心情を理解する側に立って、さらに人間描写を普遍化した。

あなたに愛される状態なら「私は足が不自由でもなく貧乏でもなく軽蔑されてもいい」（ソネット三十七番）が、あなたが私を見捨てるなら「私の足が不自由だというなら、そういう歩き方をして見せよう」（ソネット八十九番）という状態になるとシェイクスピアは表現する。貴公子が相手ともいわれる「身分違いの愛」では、「被差別意識」とでもいった表現になる。それがおそらくは『ベニスの商人』のシャイロックのセリフなどにつながると考えられる。

以下の米国シェイクスピア研究博士論文は、植民地政策、戦前の日本による韓国支配、ユダヤ人差別、インド、アイルランド、アフリカでの民族差別問題と、キーワードだけ並べれば、まるで政治経済外交に関わる国際問題がテーマの論文かと見まがう。

グリーンブラットのコロニアリズム論によって植民地政策と国籍と言語の関係を論じるもの⁸がある。まさに移民の国アメリカならではの論考である。

戦前は坪内逍遙からの訳しかなく、戦後アメリカの影響でやっとシェイクスピア原文からの直接の韓国語訳が出たとする、韓国におけるシェイクスピア受容史についての論考⁹がある。アジア系の移民も飲み込み、世界の文化を包含する米国の特徴が表れている。

アメリカのユダヤ人社会でのシェイクスピア受容を考察したもの¹⁰は多民族国家米国の特徴そのものである。

インドで非宗教的植民地教育としてシェイクスピアなど英文学が採用され、白人と非白人の対峙が教育される意味を、第三世界の女性である論文の著者の視点から解析し、白人という自己と非白人という他者という概念をたて、ニュークリティシズム、フライからラカンを経て、ポスト・コロニアリズムに至るシャイクスピア批評を踏まえて論評した論文¹¹がある。

アイルランドの植民地化は、イングランド化したアングロ・アイリッシュの植民地化という複雑な面がある。そうした微妙な関係を、16世紀の資料や『リチャード二世』をもとに解析

8 Baker, David John, *Who talks of my nation?: colonialist representation in Shakespeare and Spenser*, (1991). 930.25||B17||Wh

9 Kim, Jong-hwan, *Shakespeare in Korea: 1906-1989*, (1992). 930.28||Sh||Kim

10 Berkowitz, Joel Baruch, *Shakespeare on the American Yiddish Stage*, (1995). MF||189||19

11 Gavaskar, Vandana S., *Post-Colonial Shakespeare: Fictions of Self, Fictions of Others*, (1995). MF||189||76

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する

した論文¹²がある。

キッドの『スペインの悲劇』、マーロウの『マルタ島のユダヤ人』、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』、ベン・ジョンソンの『黒と美のマスク』を論じ、典型的なスペイン人、ユダヤ人、ムーア人などが登場することに、民族ナショナリズムを見るという論考¹³がある。

アフリカ系アメリカ人の女性として、シェイクスピアの立場を解析し、全体として有色人種への理解がシェイクスピアにあったとする論文¹⁴がある。『ヴェニスの商人』のモロッコ王の台詞から、『夏の夜の夢』のハーミアとヘレナのちょっとした浅黒さをからかう台詞まで、引用例解析の詳細さが論文作者の敏感さを反映している。黒人作家の作品について、シェイクスピア分析成果による解析もする。シェイクスピアの『ソネット集』にも反映した差別意識の敏感さが主眼になっている。風土、肌の色、階級の関係を探求し、黒い肌に西欧人が持つ意識を、北の風土に生きる人々としてイギリス人がどう持ったかを探求し、『オセロ』は黒い肌を情熱的と見てもモラルに放縦なのは白人だとも考察できるとし、むしろ北の風土に生きるイギリス人という白人がモラルで転落しやすいことを表現していると指摘する、白人の権威が二十世紀に失われることまで考察する論考¹⁵がある。

これだけの論文を生むことから逆にシェイクスピア作品の構造が推定されるのではないか。それは大英帝国発祥のところで英国という国家の存立に心をくだいたベーコンの考え方に、同じ問題を「身分違いの恋」で敏感に感じとるシェイクスピアという名の詩人が参加して出来上がった構造ということではなからうか。

以上述べたことは、ベーコンの科学と無関係ではない。

ベーコンは、熱が分子の活性化であることを思索によって突き止め、科学的な帰納法の方法論を考えた。そのことと、例えばシェイクスピアの『十二夜』の中で、主人公のヴァイオラがお小姓に化けてオーシーノ公爵の宮廷に入り込みオリア姫への恋の使いをさせられる。そのとき「私が恋したらこんな風にする」と恋の情熱を語る時、「空気と土の二元素の中で憐れと思わないではいられない」程に恋の想いを打ち明けるといふ。相手の魂に向かって恋の想いを伝えようとする情熱を、ベーコンの「科学論文」での分子の活性化のくだりを利用したのだと思う。

人間も分子もエネルギーを帯びた存在で、エネルギーを活性化すればあらゆる壁を乗り越え

12 Glover, Laurie Carol, *Colonial Qualms/Colonial Quelling: England and Ireland in the Sixteenth Century*, (1995). MF||189||67

13 Phillips, David E., *Promoting the Nation: the Rise of Ethno-Nationalism and Early Modern Drama*, (1996). MF||194||19

14 Birge, Amy Anastasia, *'Mislike me not for my complexion': Shakespearean Intertextuality in the Works of Nineteenth-Century African-American Woman*, (1996). MF||194||5

15 Floyd-Wilson, Mary, *"Clime, Complexion, and Degree": Racism in Early Modern England*, (1996). MF||194||22

られるというのが、この場面の「思想」だと思う。ベーコンの科学と、王侯貴族から庶民までを人間の愛の力に注目して描いたシェイクスピアの信念との結合であったと思う。

この「思想」は十八世紀以後も発展する。

演劇と直接は関わらぬ「ニュートン以後の近代科学」も、王立協会、王立研究所が着々と進展させ、ロンドン市民の富裕層に、ボイル・レクチャーズに引き続いてその成果を報告し続けた。そして、そうした事象に関りをもつすべての人々にとって、アイルランドとアメリカは、常に視野に入っていた。

こうした流れの主要部分を自然科学に注目してジェイコブは「ニュートン主義」と呼ぶ。

つまり「ニュートン主義」時代にシェイクスピアは復活した。

ニュートンは万有引力の法則や光が屈折率の違う物質の中を進んで像を結ぶことを観察記述する業績に、イギリス革命の闘志的発言をし、政治権力に近づき、造幣局幹部として賈金摘発をするなどした。

もちろん、このいささか「田舎者で権力志向」の嫌な面もある「科学の英雄」だけが「ニュートン主義」時代を築いたわけではない。むしろ逆に「都会的で市民派」のフックなども、そうした「科学時代」を支えていた。すでに、かなり詳しく説明したロンドン市民の「職人の知恵と学問の結合」を期待する運動が結実した機関が、そもそも王立協会の発祥の地なのだ。

「都会的で市民派」「職人の知恵と学問の結合」に大法官といういささかの「権力志向」を加えたら、それはベーコンである。

それなら「ベーコン主義時代」（そういう用語は存在しないが）がシェイクスピアの原作の背景ではないかというのが、私の主張したいことである。また、それがシェイクスピア＝ベーコン説の当否を時代背景の面から決めることになると思う。

さて、とにかく、用語として存在しない「ベーコン主義時代」ではなく「ニュートン主義」時代にシェイクスピアは復活した。その時代に注目したジェイコブは、ニュートンの弟子たちが多く参加したボイル・レクチャーズのお説教から「科学イデオロギー」を抽出して「ニュートン主義」とした。けれど、そもそも「神」を語るお説教の匂いが強くて、同時に「科学」を語るものを、はじめから結論ありきで探し出したフシもある。何もニュートンやライプニッツといった、「神」とは関係なく、数式で科学が語れる時代に、お説教と科学を結びつけるものを探し出す必然性が、よく理解できない面がある。

キリスト教徒は、まず性行為によって生まれたという人間としての原罪を背負う。それは生命力ということでもある。罪を背負って人間の代わりに磔で死んだキリストの受難はパッションと言う。「バレーエへの情熱」といった用法の「情熱」も同じ語のパッションである。つまり、人間は原罪によって生まれた、その罪を償う形で、より良い人生を生きるための厳しい訓練を受ける。それは「苦悩の地獄」というより「訓練の地獄」といった方がいいかもしれない。

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する

これは、「シェイクスピア（あるいは演劇）と科学」を考える上で詳細に論じなければならないことである。その原点が、ベーコンの思想、特に「迷信は神性を汚すもの」とするベーコンの「神」ではなかろうか。ニュートンは、聖書学や錬金術に傾倒したりして、そのこと自体は「論じれば」現代にもつながる「科学イデオロギー」になるかもしれない。ジョン・ロックとの親交があり、二人は深いディスカッションもしている。しかし、ニュートンの言葉は、そのままでは現代にもつながる「科学イデオロギー」とは言いがたい。むしろ「魔術」といったいい「癖のあるイデオロギー」だ。ニュートンを最後の魔術師と捉える捉え方もある。もちろん「癖のないイデオロギー」が「科学イデオロギー」だと言う一昔前の常識に疑問を呈して、近代科学の盟主ニュートンの周辺を「癖のあるイデオロギー」としての「科学イデオロギー」を探ったのがジェイコブの努力であった。その成果を否定するものではない。

けれど科学が発展し、力を持つのは、科学が無色透明で「癖がないイデオロギー」だからという面も忘れてはならない。この点に着目するとき、「ニュートン主義」より「ベーコン主義」の方が、より趣旨に合致する。身分、人種の壁を乗り越える情熱的な「愛」の「思想」をシェイクスピアは作品に頻出させる。それを支えるのは「ベーコン主義」ではなかろうか。